



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

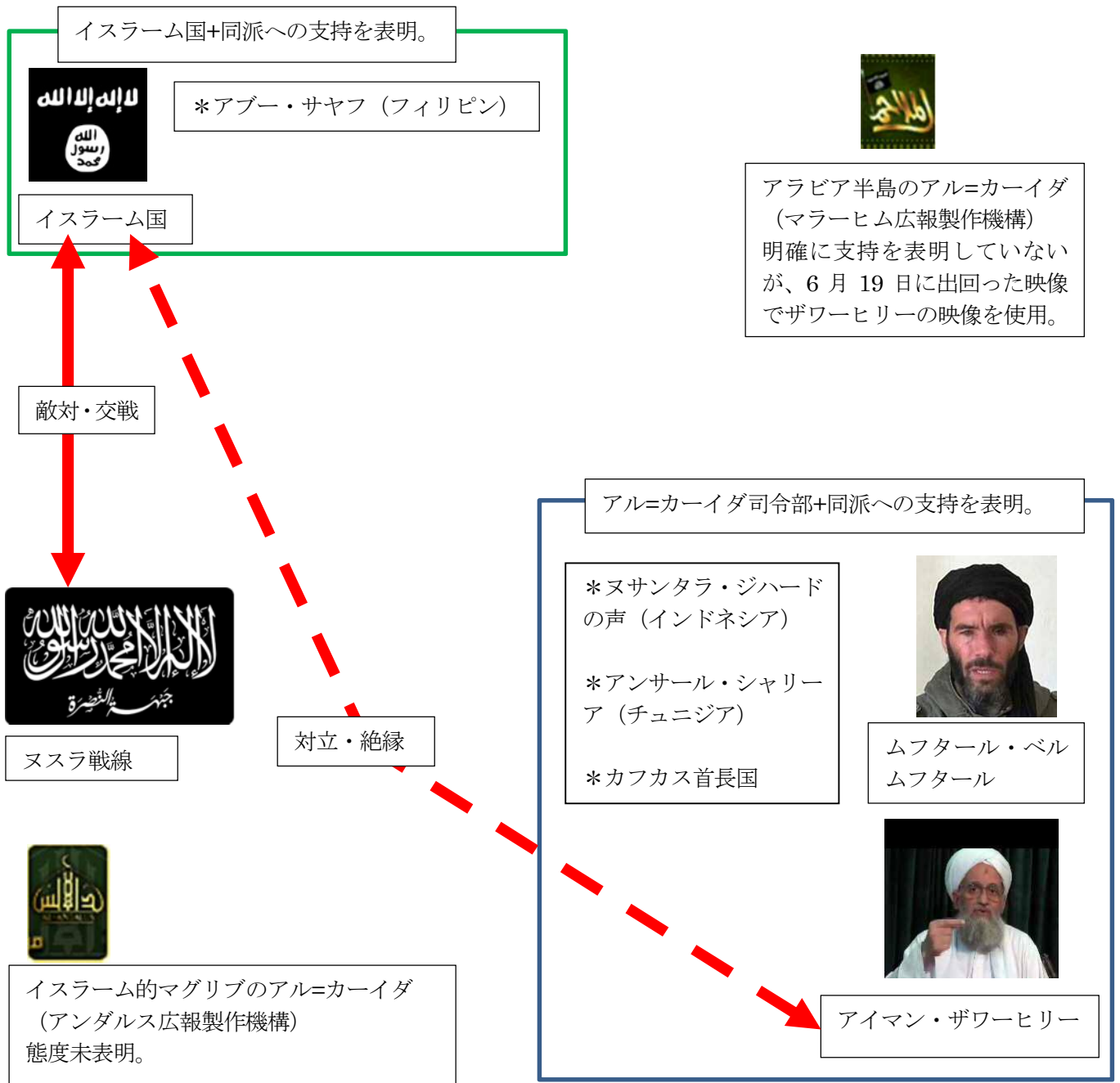
イラク：イラクとシャームのイスラーム国についてのイスラーム過激派諸派の反応

イラクとシャームのイスラーム国（以下、イスラーム国）の活動のあり方は、同派とアル=カーイダ司令部が絶縁状態になったことに象徴されるように、各地のイスラーム過激派に影響を与えた。イスラーム過激派諸派が広報の場として利用していたインターネットサイトでも、サイトの運営者がイスラーム国とアル=カーイダ、ヌスラ戦線との対立について態度を表明し、ヌスラ戦線による広報活動を掲載しない、などの行為に出た例もある。また、こうしたサイトを閲覧する、イスラーム過激派のシンパ・ファン層の間では、イスラーム国が「シリアはヌスラ戦線に任せ、イスラーム国はイラクでの活動に専念すべし」とのザワーヒリーの方針を、(中東地域を現在の国境に分割した)「サイクス・ピコ体制を容認したものであり、アル=カーイダの変質である」と主張したことが支持された。彼らの間ではイスラーム国を支持する傾向が強い投稿が優勢となっているように思われる。

また、イスラーム過激派諸派は、インターネット上の広報活動で国際的な連帯を表明することが多く、自派の活動地域と直接関係のない紛争や話題についても「各地のムスリムへの連帯表明」のような形で立場を表明してきた。今般イスラーム国がイラクで攻勢をかけ、その「戦果」がイラクの政治体制を動揺させたり、シーア派との「宗派紛争」の激化が予測されたりするようになったが、各地のイスラーム過激派諸派がこの事態について自らの立場を表明することが予想される。しかし、イスラーム国と絶縁状態のアル=カーイダや、イスラーム国と交戦中のヌスラ戦線のように、今般の「戦果」を支持・賞賛できる立場にない組織・活動家もいる。ここから、現在のイラク情勢についてのイスラーム過激派諸派の立場も分裂・混乱することが見込まれる。下図では、イスラーム国とアル=カーイダとの関係について、現時点までで判明している諸派の態度を整理した。アル=カーイダは、ビン・ラーディン殺害やイスラーム国との絶縁を経て、イスラーム過激派内での威信が低下しつつある。その一方で、イスラーム国がアル=カーイダに替わるだけの威信を確立しているとはいえない。なお、現在イスラーム過激派諸派や活動家による情報の発信は、ツイッター、facebookを中心に極めて分権的・分極的な状況にある。現状は、あらゆる主体が任意に情報を発信可能である。

(図は次頁)

図：イスラーム国とアル=カーイダとの関係についてのイスラーム過激派諸派の対応



(イスラーム過激派モニター班)